

YUKI Ryota

幸 亮太

富山大学 学術研究部 芸術文化学系 講師

これまでの研究制作について

私の専門とする研究は日本画による絵画制作とその技法材料の研究である。

日本画とは、日本で千年以上変わらずに受け継がれてきた、またその過程で発展してきた画材や技法を用いて、現代に生きる自身の価値観を表現し、制作する絵画であると私は解釈している。日本画の代表的な画材に天然の鉱物や岩石を砕いて作る、岩絵具という絵具がある。岩絵具は砂または粉のような粒子状の絵具で、使用時にその都度、一色ずつ絵皿に取り出し、膠を加え、指の腹を使って溶きおろして使用する。そのため岩絵具は描く上での工程も多く、粒子状の絵具は扱いても難しいため、思い通りの表現をするには多くの経験が必要となる。しかしその反面、他の画材では得ることの出来ない岩絵具ならではの美しい色彩と物質感のある表現が可能であり、独特な魅力がある。それ以外にも日本画は和紙、絹、筆、墨、染料、膠、箔など伝統的な素材や道具に支えられており、それらを使った日本画ならではの技法による様々な表現が可能である。一見、制約が多く非合理的に思えるような素材から成る日本画だが、非常にシンプルな絵画表現だからこそ、そこに奥深さと追求する楽しさや魅力があるのだと感じている。

私は大学院在学時に授業の一環として、平安時代に制作された国宝伴大納言絵巻の現状模写を行った経験があり、現在も模写事業に参加している。模写を通して、平安時代の表現方法や使用されていた絵具が今も変わらずに受け継がれており、現在の私たちの表現と共通していることを体感した。この経験から、改めて日本画の画材や技法の奥深さを知り、自身の制作にも伝統的な画材や表現を積極的に取り入れていきたいと考えるようになった。

また日本の絵画では昔からモチーフに対する観察と写生を大事にしてきた歴史がある。私の絵画制作もモ

チーフと出会い、写生をすることから始まる。写生を通して対象を実際に観る、感じることから作品の発想が生まれ、モチーフから得た情報を自分を通して独自性のある発想や新たな表現が生まれてくると感じている。描く対象について、生態や構造を理解することも写生をする上で大事なことであり、対象をじっくりと観察し寄り添う所から、繊細ながらも力強い表現が生みだせるのではないかと考え制作を試みている。

私はこれまで身近に存在する動植物から旅先で出会った街並みや風土まで様々なものを絵にしてきた。動植物は日本画において花鳥画など、古くから親しまれてきた画題であり、自身も自然から作られた岩絵具との親和性が高いと感じることから、モチーフとして用いている。また、大学院修了制作の取材の為、長崎県対馬を訪れた経験があり、その時の経験から、その土地ならではの暮らしを反映した景色や街並み、風土に興味を持つようになった。どちらも自身がモチーフとなる対象と出会うことから作品の発想が生まれたという所に共通点がある。

近年では、身近な動植物の持つ自然のフォルムとその中に存在する、規則性と不規則性に着目し、ありのままの形を表現しようと試みた作品を小作品を中心に制作している。また同時に、旅先の風景や何気ない街並みの中に存在する、一見無秩序に見える一つ一つのフォルムや色彩が重なり絡み合うことで有機的な空間を形成する姿に魅力を感じ、それらを風景画として表現しようと試みた作品を制作している。

今後は、より日本画という絵画表現が持つ画材や素材、技法に重きを置いた表現を意識し、なぜ日本画でなければいけないのかという、その必然性を探りながら制作をしていきたいと思っている。さらには、現代を生きる私自身の価値観や表現したいことと、日本画という表現との親和性を模索していき、より独創性のある絵画表現を追求していきたいと考えている。



径 (2021) / 再興第 106 回院展出品



鯉魚門 レイユームン (2021) / 第 76 回春の院展出品



渡蟹図 (2021) / ビエンナーレ TOYAMA 2021 出品



国宝 伴大納言絵巻上巻 現状模写 (2014) / 東京藝術大学蔵